

# 巻頭言

## 歴史と記憶に残る2020年

徳島赤十字病院 事務部長 吉川 和彦

今年度も無事、院内医学雑誌「Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal」を発刊することができました。業務多忙の中、投稿していただいた皆さんに感謝いたします。

さて、2020年は新型コロナウイルスの猛威にさらされ、歴史に残る忘れられない年となりました。2019年12月、中国武漢市で初めて患者が報告され、瞬く間に世界中に蔓延。COVID-19（CoronaVirusDisease-2019）と命名され、日本ではダイヤモンド・プリンセス号での集団感染を皮切りに日本全土へ広がりました。徳島県においては、京阪神の人口密集地に近いという条件でありながら、長らく一桁の陽性者数を保っていました。しかしそれもつかの間、この執筆時（2020年9月）には、あっという間に感染者数が四国一となり、収束の目処も立っていない状況です。

楽しみにしていた東京オリンピックも延期され、学会・研修会やスポーツ大会、県外出張はもちろん、家族旅行や友人との外食さえ自粛を強いられました。また、患者の受診控えが顕著に発生し、当院の新規入院患者数は大きく減少、一時期は入院患者数が300人を切り、病床稼働率が80%に留まるなど、信じられない数値が並び、経営を大きく逼迫しました。

県内で相次ぐクラスターの発生に伴い、8月には初めてコロナ患者を受入れ、9月には5階西病棟をコロナ占有病床として稼働させるなど、職員が一致団結し、懸命な医療活動を続けています。職員の頑張りに頭が下がる思いです。

さて、話は変わりますが、論文を発表するというのは、世の中に有益な情報を発信し、医学の発展に寄与するものです。それが例え経験であったとしても、あるいは不幸な結果に終わった症例でも、公表し後の研究者に託す事が重要です。我々は、その事実をより多くの人に伝える義務があります。もし、その情報を発信しなければ、その状況に立ち会った人にしか知り得ない過去の事実になってしまいます。退職後でも、縁起でもないですが、あなたの没後でも、活字（論文）は永遠に生き続けるのです。

また事務職員の皆さん、論文は医師をはじめとする医療職にしか書けないものではありません。皆さんの日頃の工夫や成果を発表する場でもあります。奮って投稿していただくと嬉しい限りです。徳島赤十字病院の医学雑誌から、素晴らしい発見や功績が出ることを祈っております。

